

新型コロナウイルス感染症に関連して、一般市民にとっては新しい用語が次から次へと出てきた。クラスター、オーバーシュート、ソーシャルディスタンス、ロックダウン、ウィズコロナ、アフターコロナ、ポストコロナなどである。パンデミックは以前から使われてきた。俗称ではあるがアベノマスクというものもある。市や県から支給されたものと区別するにはいいかもしれない。

これらの共通点は、カタカナ表記だということである。都市封鎖と言われると、いよいよそういう段階かと思わされるが、ロックダウンと言われると何か大変な状況になりそうな気がしてくる。クラスターという言葉の響きにも怖いものがある。横文字の方がインパクトが強いのである。社会的距離と言ってもたぶん浸透しないが、ソーシャルディスタンスとなると、一気に広まり、その言葉が定着していく。

ところが、ここに来て「新しい生活様式」という言葉が出てきた。横文字であれば、ライフスタイルでもよさそうなものだが、この言葉は既に定着しているため新鮮味がない。生活様式などという当たり前の日本語が普及することは珍しいことではなかろうか。

新しい生活様式には、学校も含まれる。「学校の新しい生活様式」である。生活様式と言うからには、一時的ではなく、長丁場になるということである。新型コロナウイルス感染症と共に生きていく社会を前提としているということである。

学校においては、マスクの着用、手洗いや咳エチケット、換気といった基本的な感染症対策に加え、感染拡大リスクが高い「3つの密」を徹底的に避けるために、身体的距離の確保などの感染対策を継続することが必要とされる。感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減しつつ、教育活動を継続し、生徒の学びを保障していくことが求められる。

「新しい生活様式」の実践例としては、人との間隔は、できるだけ2m（最低1m）空ける。遊びに行くなら屋内よりも屋外を選ぶ。会話をする際は、可能な限り真正面を避ける。家に帰ったらまず手や顔を洗う。できるだけすぐに着替える。シャワーを浴びる。

移動に関する感染対策としては、感染が流行している地域からの移動、感染が流行している地域への移動は控える。帰省や旅行はひかえめに。出張はやむを得ない場合に。発症したときのため、誰とどこで会ったかをメモにする。

日常生活の生活様式として、買い物では、通販も利用、1人または少人数ですいた時間に、電子決済の利用、計画を立てて素早く済ます、サンプルなど展示品への接触は控えめに、レジに並ぶときは、前後にスペースとなっている。食事では、持ち帰りや出前、デリバリーも、屋外空間で気持ちよく、大皿は避けて、料理は個々に、対面ではなく横並びで座ろう、料理に集中、おしゃべりは控えめにとなっている。娯楽、スポーツ等では、公園はすいた時間、場所を選ぶ、筋トレやヨガは自宅で動画を活用、ジョギングは少人数で、すれ違うときは距離をとるマナー、予約制を利用してゆったりと、狭い部屋での長居は無用、歌や応援は、十分な距離かオンラインとなっている。

また、働き方の新しいスタイルには、テレワークやローテーション勤務、時差通勤でゆったりと、オフィスはひろびろと、会議はオンライン、名刺交換はオンライン、対面での打合せは換気とマスクなどがある。

こうしてみると、随分とあるが、その多くは既に実践していること、あるいは、3密を避けることを考えれば、自ずとそうするであろうことである。この場合の「様式」とは、習慣・約束などで定められたやり方のことである。習慣化されるまで続けなければならない。意識しなくてもできるようになるまで続けると言うことである。学校は教育をする場である。これから生徒と教員で学校の新しい生活様式を創り上げていきたい。